

Oracle® Content Management SDK

リリース・ノート

10g (9.0.4) for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit)

2004 年 2 月

部品番号 : B13556-01

Oracle Content Management SDK リリース・ノート, 10g (9.0.4) for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit)

部品番号 : B13556-01

原本名 : Oracle Content Management SDK Release Notes, 10g (9.0.4) for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit)

原本部品番号 : B10691-01

Copyright © 1999, 2003, Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

1 Oracle® Content Management SDK for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit)

| | |
|--|------|
| 概要 | 1-2 |
| Oracle Content Management SDK | 1-2 |
| 警告 | 1-2 |
| インストール時の注意 | 1-2 |
| Oracle Content Management SDK 10g (9.0.4) の新機能 | 1-3 |
| Oracle Content Management SDK での開発 | 1-3 |
| 動作保証およびシステム要件 | 1-4 |
| クライアントの動作保証 | 1-4 |
| SMB | 1-4 |
| Web ブラウザ (Oracle CM SDK Manager および Application Server Control 用) | 1-5 |
| Web ブラウザ (Web Starter Application 用) | 1-5 |
| FTP クライアント | 1-5 |
| AFP | 1-5 |
| NFS クライアントのサポート | 1-5 |
| WebDAV: Web フォルダ | 1-6 |
| WebDAV: Oracle FileSync クライアント | 1-7 |
| 電子メール・クライアント | 1-7 |
| コマンドライン・ユーティリティ・クライアント | 1-7 |
| Javadoc リンク | 1-7 |
| Oracle Content Management SDK で廃止された機能および変更内容 | 1-8 |
| AFP サポートの変更点 | 1-8 |
| FTP コマンドの廃止内容 | 1-8 |
| 廃止されたクラス: SearchObject | 1-8 |
| Definition (定義) クラスの使用における今後の変更内容 | 1-8 |
| 新しいクラス: LockObject | 1-9 |
| プロトコル・サーバーでの解析およびレンダリング | 1-9 |
| Oracle CM SDK でのフレームワークの解析およびレンダリング | 1-9 |
| VersionSeries クラスの PendingPublicObject 属性 | 1-10 |
| Oracle Internet Directory の問題 | 1-10 |
| Oracle Internet Directory 変更ログを消去するための Oracle Internet Directory のレプリケーション・ サーバーの実行 | 1-10 |
| 既知の不具合 | 1-10 |

Oracle[®] Content Management SDK for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit)

概要

このドキュメントには、発行時における最新かつ最も正確な情報が記載されています。発行後に明らかになった情報は、通常のサポート経路を介して入手できます。リリース・ノート of the 最新情報および追加情報には、次の OTN-J (Oracle Technology Network Japan) サイトからアクセスできます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

このドキュメントの内容は、Oracle Content Management SDK for Solaris Operating System (SPARC 32-bit and SPARC 64-bit) 10g (9.0.4) に特化しており、その項目は次のとおりです。

- [Oracle Content Management SDK](#)
- [Oracle Content Management SDK 10g \(9.0.4\) の新機能](#)
- [Oracle Content Management SDK での開発](#)
- [動作保証およびシステム要件](#)
- [Javadoc リンク](#)
- [Oracle Content Management SDK で廃止された機能および変更内容](#)
- [Oracle Internet Directory の問題](#)
- [既知の不具合](#)

Oracle Content Management SDK

Oracle Content Management SDK (Oracle CM SDK) は、コンテンツ管理アプリケーションを構築するための堅牢な開発プラットフォームです。Oracle CM SDK は、バージョンニング、チェックイン / チェックアウト、セキュリティ、検索、拡張メタデータおよび標準的なコンテンツ管理操作のための一連の Java API を提供し、次の機能を備えています。

- Oracle CM SDK リポジトリへのファイル・ベースのアクセスを提供するプロトコル・サーバー (NFS、HTTP/WebDAV、AFP、SMB/NTFS、FTP、CUP など)
- 開発者向けドキュメント、Javadoc およびサンプル
- Oracle Workflow、Oracle Text、Oracle Internet Directory、Oracle Real Application Clusters (RAC) などの関連テクノロジーとの統合
- Oracle Database Server および Oracle Application Server により提供されるスケーラビリティ、信頼性、セキュリティおよびプラットフォーム独立性

これらの特長および機能の目的は、コンテンツ管理ベースのアプリケーションを、他のプラットフォームの場合よりも迅速かつ良好に市場に投入できるように開発者を支援することです。

リリース 9.0.3 より前では、Oracle CM SDK は Oracle Internet File System (Oracle9iFS) と呼ばれていました。

警告

Oracle CM SDK 10g (9.0.4) と以前のバージョンの Oracle Internet File System (9.0.2 以下) との大きな違いは、デフォルトの Web ユーザー・インタフェースが Web Starter Application に置き換わったことです。詳細は、Web Starter Application のサンプル・コードに含まれている ReadMe ファイルを参照してください。

また、このリリースでは Windows UI は使用できません。

インストール時の注意

以前のバージョンの Oracle9iFS (9.0.2 以下) から Oracle CM SDK 10g (9.0.4) にアップグレードする場合は、10g (9.0.4) では利用できない機能 (Web UI または Windows UI など) を使用していないことをあらかじめ確認してください。使用している場合は、アップグレードしないでください。スキーマを Oracle CM SDK 10g (9.0.4) にアップグレードすると、Oracle9iFS リリース 9.0.2 以下のバージョンで動作が保証されているコンポーネントは実行できなくなります。

次の推奨事項に注意してください。

- Oracle CM SDK 10g (9.0.4) で利用できない Oracle9iFS リリース 9.0.2 のコンポーネントが必要な場合は、アップグレードしないでください。
- 同じ Oracle ホームまたはマシンに本製品の 2 つのバージョンをインストールしないでください。
- 異なるマシンに本製品の 2 つのバージョンをインストールすると、製品は同じスキーマを指すことができなくなります。
- Oracle Files は Oracle CM SDK 10g (9.0.4) と同じマシンにインストールしないでください。

アップグレードの詳細は、『Oracle Content Management SDK インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

Oracle Content Management SDK 10g (9.0.4) の新機能

Oracle Content Management SDK 10g (9.0.4) の新機能は次のとおりです。

- Web Starter Application
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control への機能拡張
- ドメイン・コントローラの移行
- Oracle Internet Directory グループのサポート
- DBMS_JOBS を介した Oracle Text 索引の自動同期
- 強化されたグローバリゼーション・サポート
- ドキュメントへのリンク

Oracle Content Management SDK での開発

Oracle CM SDK は、カスタム・アプリケーションを構築するためのプラットフォームを提供します。Oracle CM SDK の今後のリリースとの互換性を維持するために、次のガイドラインに従ってください。

- 公開されているクラスおよびメソッドを使用する。Javadoc で公開されているクラスおよびメソッドのみを使用してください。Oracle CM SDK の内部で使用されているクラスおよびメソッドは多数存在しますが、これらは公開されている Javadoc の一部ではありません。オラクル社では、これらのクラスおよびメソッドを予告なく変更または削除する権利を保有しています。未公開のクラスまたはメソッドを使用すると、アプリケーションの損傷や予期しないアプリケーション動作が発生する可能性があります。
- アプリケーションのネームスペースを設定する。将来的に拡張される Oracle CM SDK クラスと開発者独自のカスタム・クラスとの競合を避けるため、サブクラス、属性およびデータベース表の接頭辞には固有の識別子を付けてください。たとえば、ACME 社の開発者が PRIORITY という属性名の REPORT というサブクラスを作成する場合、このサブクラスは、ACME_PRIORITY という属性を持つ、ACME_REPORT という名前のサブクラスにします。既知の不具合番号 1857689 も参照してください。
- Oracle CM SDK スキーマを直接変更しない。スキーマに対するすべての操作は、公開されている API を介して行う必要があります。

動作保証およびシステム要件

Oracle CM SDK のデータベース層として、Oracle9i Database Server リリース 9.0.1.4 またはリリース 9.2.0.3（以上）を使用してください。Oracle CM SDK は、Oracle Workflow リリース 2.6.2 およびリリース 2.6.3 での動作が保証されています。

クライアントの動作保証

次のクライアント・ソフトウェアは、Oracle CM SDK に対応するかどうかテストおよび動作確認されています。次に示すオペレーティング・システムとアプリケーションのサービス・パック、およびリリース番号以上のリリースがサポートされます。

SMB

1. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーションとの組合せ

- Microsoft Office 2000 Service Pack 3（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000

2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3 と次のアプリケーションとの組合せ

- Microsoft Office 2000 Service Pack 3（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
- Microsoft Office XP Service Pack 2（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
- Microsoft Visio 2000、2002
- Microsoft Project 2000、2002
- Adobe Acrobat 5.0

3. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1 と次のアプリケーションとの組合せ

- Microsoft Office 2000 Service Release 1（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
- Microsoft Office XP Service Pack 2（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002

- Microsoft Visio 2000、2002
- Microsoft Project 2000、2002
- Adobe Acrobat 5.0

Web ブラウザ（Oracle CM SDK Manager および Application Server Control 用）

1. Microsoft Windows
 - Netscape Communicator 7.0x
 - Mozilla 1.4
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2（以上）
2. Macintosh
 - Microsoft Internet Explorer 5.2
3. Linux
 - Netscape Communicator 7.0x
 - Mozilla 1.4
4. UNIX
 - Mozilla 1.4

Web ブラウザ（Web Starter Application 用）

1. Microsoft Windows
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2（以上）

FTP クライアント

1. Windows
 - OnNet FTP 4.0
 - WS_FTP Pro 7.6
 - Cute FTP XP 5.0
 - Hummingbird 7.0
2. UNIX
 - Command line ftp Solaris 2.8、2.9
3. Macintosh OS X.2
 - Transmit 2.5.1

AFP

1. Mac OS X.2 と Microsoft Office Mac X との組合せ（Office の内訳は次のとおり）
 - Microsoft Word for Mac OS X
 - Microsoft Excel for Mac OS X
 - Microsoft PowerPoint for Mac OS X

NFS クライアントのサポート

1. Microsoft Windows
 - Hummingbird NFS Maestro 6.0（Windows 98、NT）
 - Hummingbird NFS Maestro 7.0（Windows NT、2000）
 - OnNet 7.0（Windows 2000 のみ）

2. UNIX

- Solaris 2.8、2.9
- Linux Advanced Server 2.1 (Kernel 2.4.9-e.16)
- Linux Red Hat 8.0

WebDAV: Web フォルダ

1. Windows XP Professional Service Pack 1

- Microsoft Office XP Service Pack 2、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1、MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17 (Office の内訳などは次のとおり)
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- Microsoft Office 2000 Service Release 1、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.5219.0 (Office の内訳などは次のとおり)
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft Visio 2000
 - Microsoft Project 2000
 - Adobe Acrobat 5.0

2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3

- Microsoft Office XP Service Pack 2、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1、MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17 (Office の内訳などは次のとおり)
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- Microsoft Office 2000 Service Pack 3、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0 (Office の内訳などは次のとおり)
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft Visio 2000
 - Microsoft Project 2000
 - Adobe Acrobat 5.0

3. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーションとの組合せ
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0（Office の内訳などは次のとおり）
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000

WebDAV: Oracle FileSync クライアント

1. Windows XP Professional Service Pack 1
2. Windows 2000 Professional Service Pack 3
3. Windows NT Workstation Service Pack 6
4. Windows 98

電子メール・クライアント

1. Eudora 4.3 for IMAP, SMTP
2. PINE 4.33 for IMAP, SMTP
3. Outlook Express 6.0（以上）for IMAP, SMTP
4. Outlook 2000 for IMAP, SMTP
5. Netscape Communicator 7.0（以上）

コマンドライン・ユーティリティ・クライアント

1. MS Windows NT
2. MS Windows 2000、XP、2003
3. Solaris 2.8、Solaris 2.9、Linux Advanced Server 2.1

Javadoc リンク

Internet Explorer ブラウザまたは Windows 2000 オペレーティング・システムの一部のバージョンでは、Oracle CM SDK Javadoc 内のリンクが機能しません。この問題を回避するため、次のブラウザは使用しないでください。

- Internet Explorer 6.0（Windows 2000 Service Pack 2 の場合）
- Internet Explorer 6.0.26（Windows XP の場合）

Javadoc の表示には、次のいずれかを使用することをお勧めします。

- Internet Explorer 6.0（Windows 2000 Service Pack 3 の場合）
- Internet Explorer 6.0.28（Windows XP の場合）
- Netscape Communicator 7.0x

Oracle Content Management SDK で廃止された機能および変更内容

Oracle CM SDK Java API では、新しい機能やテクノロジーを活用するために、いくつかのクラス、属性およびメソッドが廃止される場合があります。今後の主なリリースでは、廃止されたこれらの要素は削除されるものと考えてください。これにより、アプリケーションを変更してサポート対象のクラス、属性およびメソッドを使用するためのリリース・サイクル全体を把握できます。

このリリースで廃止された機能を参照するには、Javadoc の「Deprecated」リンクにアクセスしてください。廃止の各項目には、サポートされている同等の使用法を示すコメントが記載されています。また、`-deprecation` フラグを使用して Java アプリケーションをコンパイルすれば、廃止されたクラス、フィールドまたはメソッドが、対象のアプリケーションによって使用されているかどうかも確認できます。

重要な変更点および廃止された機能は、主に次のとおりです。

AFP サポートの変更点

Oracle CM SDK の今後のリリースでは、AppleTalk Filing Protocol (AFP) はサポートされなくなります。今後のリリースでは、Mac ユーザーは SMB または WebDAV を使用できるようになります。

FTP コマンドの廃止内容

次の FTP QUOTE コマンドはこのリリースでは廃止されており、今後のリリースでは削除される予定です。

- QUOTE ACL
- QUOTE NOACL
- QUOTE ADMIN
- QUOTE NOADMIN

廃止されたクラス：SearchObject

SearchObject クラスとその関連クラスは廃止されました。SearchObject は、Oracle CM SDK の同じリリース内でのみ動作が保証されており、上位互換性がなく、利点に限りがあるため、今後のリリースでは削除されます。

使用しているアプリケーションが SearchObject を利用している場合は、次のいずれかの方法でアプリケーションを変更します。

- 必要に応じて、毎回、SearchSpecification を作成する。
- 検索ツリーを XML などのテキスト形式で保存して、その XML をドキュメントに保存する。この場合、アプリケーションは XML を使用して検索ツリーを再構築します。

Definition（定義）クラスの使用における今後の変更内容

Oracle CM SDK の次の主要リリースには、Definition クラスの使用に関する変更が追加されます。Definition クラスは、`oracle.ifs.beans.LibraryObjectDefinition` のサブクラスで、Oracle CM SDK インスタンスの新規作成や、既存のインスタンスの変更のために使用されます。以前のバージョンの Oracle CM SDK では、これらの Definition クラスには未公開のゼロ（0）引数コンストラクタが定義されていました。これは、次のような文が正常にコンパイルされ、（ほとんどの場合）正常に実行されるということを意味します。

```
DocumentDefinition def = new DocumentDefinition();
```

これは構成のバリエーションとしては正式、推奨のいずれにも該当しませんが、ほとんどの場合、適正な結果が得られます。ただし、この方法で生成された定義インスタンスを使用すると、不明な例外が発生する場合もあります。

定義オブジェクトを構成する正しい方法は、単一の LibrarySession 引数を使用する、公開済のコンストラクタ・バリエーションを使用することです。

Oracle CM SDK の次の主要リリースでは、これらゼロ（0）引数のバリエーションは削除され、それらを使用するコードはすべてコンパイル・エラーとなります。

さらに、Oracle CM SDK の次の主要リリースでは、公開済のコンストラクタ・バリエーションは、`oracle.ifs.beans.LibrarySession` 引数ではなく、`oracle.ifs.common.LibrarySessionInterface` 引数を使用するように変更されます。`LibrarySession` は `LibrarySessionInterface` を実装するため、コードを変更する必要はありません。ただし、この変更では、Oracle CM SDK に記述されているコードのうち、定義インスタンスを生成するすべてのコードを再度コンパイルする必要があります。

新しいクラス：LockObject

新しいクラスである `LockObject` は、リリース 9.0.3 で導入されました。このクラスの使用目的は、`PublicObject` に利用できる次のロック・タイプを管理することです。

- `unlock`
- `hard lock`
- `soft lock`
- `user lock`
- `timed lock`
- `session lock`

詳細は、`LockObject` Javadoc を参照してください。

プロトコル・サーバーでの解析およびレンダリング

Oracle CM SDK プロトコル・サーバー（FTP、SMB など）の多くは、ファイル転送の二次的な作用としての解析およびレンダリングを実行しなくなりました。以前のリリースでは、これらのプロトコルを介してアップロードされた XML ドキュメントが自動的に解析されていました。リリース 9.0.3 以降、この機能は廃止されました。

この廃止機能の例外は、コマンドライン・ユーティリティ・プロトコル（CUP）サーバーです。XML ファイルの解析およびレンダリングを継続するには、CUP サーバーを使用します。XML ファイルを介して Oracle CM SDK オブジェクトを作成する場合は、CUP を使用して XML ファイルをアップロードします。CUP では、XML 内のオブジェクトも引き続きレンダリングします。

Oracle CM SDK でのフレームワークの解析およびレンダリング

Oracle CM SDK でフレームワークを解析およびレンダリングする目的は、アプリケーション開発者がファイルの転送時にプロトコル・サーバーの動作を変更できるようにすることでした。プロトコル・サーバーはこの機能をサポートしなくなったため、このリリースでは、次の内容が廃止されます。

インタフェース

```
oracle.ifs.beans.parsers.Parser
oracle.ifs.beans.parsers.ParserCallback
oracle.ifs.beans.parsers.XmlParserInterface
oracle.ifs.server.renderers.Renderer
```

クラス

```
oracle.ifs.beans.parsers.IfSimpleXmlParser
oracle.ifs.beans.parsers.IfXmlParser
oracle.ifs.beans.parsers.LiteralDocumentParser
oracle.ifs.beans.parsers.ParserInputStream
oracle.ifs.server.renderers.BaseRenderer
oracle.ifs.server.renderers.SimpleXmlRenderer
oracle.ifs.server.renderers.XmlRenderer
```

ファイル・コンテンツの格納または検索（あるいはその両方）の時点で、アプリケーション開発者がファイル・コンテンツを変更する必要がある場合、開発者はドキュメントのアップロードまたはダウンロード時に入力ストリームを直接変更することによって、ファイル・コンテンツを変更できます。

VersionSeries クラスの PendingPublicObject 属性

この属性は廃止されました。これは、バージョンニングされたドキュメントがチェックアウトされる間、そのドキュメントの作業中のコピーを Oracle CM SDK の内部に保持することを目的とした機能でした。すべてのプロトコル・サーバーは、このオブジェクトを認識はするが作成はしないように、機能が拡張されています。この属性を利用するカスタム・アプリケーションがある場合は、Oracle CM SDK の次の主要リリースにアップグレードする前に、代替の実装手法を開発することをお勧めします。

Oracle Internet Directory の問題

既知の問題の詳細は、『Oracle Internet Directory リリース・ノート』を参照してください。この項では、Oracle CM SDK に固有の問題のみを取り上げます。表 1-1 「インストールおよび構成における不具合」に記載されている不具合の一部は、Oracle Internet Directory をサポートするデータベース・インスタンスを Oracle9i Database Server のリリース 9.0.1.4 にアップグレードすることで修正できます。

Oracle Internet Directory 変更ログを消去するための Oracle Internet Directory のレプリケーション・サーバーの実行

Oracle CM SDK は、Oracle Internet Directory におけるユーザーおよびグループの変更通知について、Directory Integration Platform が提供する Provisioning Integration Service に依存しています。これらの変更は、Oracle Internet Directory 変更ログに記録され、このアプリケーションに対する変更イベントとして配信される前に Provisioning Integration Service によって適切にフィルタ処理されます。レプリケーション・モードで Oracle Internet Directory サーバーを配置していない場合でも、不要な変更ログ・エントリを定期的に消去するために、ディレクトリ管理者はレプリケーション・サーバーを必ず起動するようにしてください。

ログを消去するには、次のコマンドを使用してレプリケーション・サーバーを起動します。

```
$ oidctl connect=<net_service_name> server=oidrepold instance=1 flags="-p <ldapservice_port_number>" start
```

定期的なクリーン・アップを怠ると、Oracle Internet Directory 変更ログがファイル・システム全体を占めるほど大きくなり、Oracle Internet Directory サービスが利用できなくなる可能性があります。変更ログを消去するためにレプリケーション・サーバーを起動する必要性は一時的な制約にすぎず、今後のリリースでは解消される予定です。

レプリケーション・サーバーの起動および停止の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

既知の不具合

Oracle CM SDK のこのリリースでは、次の不具合が存在することがわかっています。対処方法があるものについては、その内容が説明されています。ここでは、既知の不具合をプロセスまたはコンポーネント別に分類しています。

- 表 1-1 「インストールおよび構成における不具合」
- 表 1-2 「管理上の不具合」
- 表 1-3 「Oracle CM SDK の一般的な不具合」
- 表 1-4 「AFP の不具合」
- 表 1-5 「NFS の不具合」
- 表 1-6 「HTTP / WebDAV の不具合」
- 表 1-7 「Windows / SMB / 印刷サービスの不具合」
- 表 1-8 「電子メールの不具合」
- 表 1-9 「XML の不具合」
- 表 1-10 「Oracle FileSync の不具合」

表 1-1 インストールおよび構成における不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|-----------------|---|---|
| 2391425 | <p>NLS: AL32UTF8 データベースの日本語環境において、IFSCONFIG が失敗する。</p> <p>Oracle Text は、AL32UTF8 データベースで日本語レクサーをサポートしていません。したがって、Oracle CM SDK はアジア言語の AL32UTF8 データベースをサポートしません。</p> | データベースには AL32UTF8 ではなく、UTF8 を使用します。 |
| 2677722 | <p>構成時に OPMN のタイムアウト時間を超過していますというエラーが発生する。</p> <p>OPMN タイムアウトの値が小さすぎます。</p> | OPMN タイムアウトの値を大きくします。デフォルト値は 30 分です。 |
| 2960519 | <p>同じ中間層を使用して構成および設定された Oracle CM SDK スキーマの再利用がサポートされていない。</p> <p>同一の Oracle ホーム内で、同じ Oracle CM SDK ドメインおよびスキーマに対して Oracle CM SDK Configuration Assistant を 2 回実行すると、次の場合、ローカル・ノード内のエージェントは非アクティブになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2 回目に Configuration Assistant を実行する以前に中間層にすでにノードがあり、すべてのエージェントがそこで起動するように設定されている場合。 Configuration Assistant を 2 回目に実行するときに、「エージェントを実行」チェックボックスを選択した場合。 | <p>1 つの Oracle ホームにおける同一の Oracle CM SDK ドメインおよびスキーマに対して、Oracle CM SDK Configuration Assistant を 2 回以上実行しないことを強くお勧めします。</p> <p>Configuration Assistant を 2 回実行し、エージェントが非アクティブになった場合は、Application Server Control にアクセスし、影響を受けたノードのすべてのエージェントを「アクティブ」に設定することにより、問題を解決できます。</p> |
| 3016906 | <p>Windows 64 ビットの Oracle9i Database Server リリース 9.2 データベースに対して Oracle CM SDK を構成しようとすると失敗する。</p> <p>データベースに ctxhx 実行ファイルがありません。このファイルは、このスキーマで Oracle Text を使用可能にするために必要です。</p> | <p>解決策として、次の方法があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> Oracle Text を使用可能にせずにスキーマを作成する。 独自の ctxhx 実行ファイルを作成する。 |
| 3163780 | <p>ifsshell スクリプトには、Solaris 上での CUP クライアントの実行権限が必要。</p> <p>ファイルが FTP を介して転送されたときに、Solaris の umask 設定によってファイルのデフォルト権限が変更されました。</p> | <p>CUP クライアントを実行できない場合は、次のコマンドを使用して、ifsshell スクリプトを実行可能にします。</p> <pre>chmod +x ifsshell</pre> <p>ifsshell スクリプトは、<code>/ifs/clients/cmdline/unix</code> ディレクトリにあります。</p> |
| 3038101、3113355 | <p>9.2.0.3 または 9.2.0.4 の DBMS に対して Oracle CM SDK を構成しようとすると失敗する。</p> <p>9.2.0.3 または 9.2.0.4 のデータベースに対して構成しようとすると、アドバンスト・キューの作成時に次のエラーがログに記録されます。</p> <pre>java.sql.SQLException: ソケットから読み込むデータはこれ以上ありません。</pre> <p>この問題は、一部のストアード・プロシージャが 9.2.0.1 レベルのまま、ソフトウェアを 9.2.0.3 または 9.2.0.4 にアップグレードしたことが原因です。</p> | <ol style="list-style-type: none"> データベースを停止します。 データベースを移行モードで起動します。 <code>\$ORACLE_HOME/rdbms/admin</code> ディレクトリから <code>catpatch.sql</code> を実行します。 Oracle CM SDK Configuration Assistant を起動します。 |

表 1-1 インストールおよび構成における不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|--|
| 3151323 | IME が有効になっていると、Configuration Assistant の起動に失敗する（日本語を含むアジア圏の環境で発生）。 これは、Java アプリケーションが IME (Input Method Editor) によって干渉されるという、JDK 1.4.1 の不具合が原因です。 | IME を無効にしてから、Configuration Assistant を再起動します。 |
| 3195013 | Configuration Assistant を起動して既存のスキーマを再利用すると、Web Starter Application が使用できなくなる。 Oracle CM SDK インスタンスで HTTP ノードを設定すると、Web Starter Application は自動的に構成されます。中間層にあるスキーマを再利用し、新しいノードでエージェントを実行するように選択すると、元の中間層で Web Starter Application が非アクティブになります。 | Application Server Control にログインして、Web Starter Application を再度アクティブ化します。 |
| 3163079 | Oracle CM SDK のインストール時に「製品の言語」ボタンが使用できない。 Oracle CM SDK のインストール時には、言語を選択する方法はありません。 | Oracle CM SDK にはすべての言語が自動でインストールされるため、インストール時に「製品の言語」ボタンをクリックする必要はありません。 |
| 1857689 | カスタム・クラスが出荷時の状態の新規の Oracle CM SDK クラスと競合し、アップグレードに失敗する。 以前のリリースの Oracle Internet File System または Oracle CM SDK を使用して作成したカスタム・クラスが Oracle CM SDK の新しいクラスと競合している場合、Oracle CM SDK へのアップグレードは失敗します。 | アップグレードする前に、競合するカスタム・クラスを削除し、競合しない名前で再作成する必要があります。Oracle CM SDK に追加された新しいクラスは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ <i>interMedia</i> Audio■ <i>interMedia</i> AudioCdTrack■ <i>interMedia</i> Image■ <i>interMedia</i> Movie■ <i>interMedia</i> Source■ <i>interMedia</i> Video■ <i>MediaTextBlob</i>■ <i>NodeConfiguration</i>■ <i>PortletUserProfile</i>■ <i>Rfc822ContentObject</i>■ <i>Rfc822Message</i>■ <i>ServerConfiguration</i>■ <i>ServiceConfiguration</i> |
| 3175218 | Oracle CM SDK のアップグレード後、Oracle Internet Directory を資格証明管理に使用している場合、プロトコル・サーバーが起動に失敗する。 これは、Oracle CM SDK アプリケーションの実体をいくつかの OID DAS グループに追加する必要があるために発生します。 | <i>ifscmca</i> ツールを実行して、アプリケーションの実体を OID インスタンスに再登録します。これは、Oracle CM SDK 10g (9.0.4) へのすべてのアップグレードにおけるアップグレード後の必須作業です。 <i>ifscmca</i> の詳細は、『Oracle Content Management SDK 管理者ガイド』を参照してください。 |

表 1-1 インストールおよび構成における不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|---|
| 3214142 | <p>Solaris 2.9 では、通常ノードの Java コマンドを変更する必要がある。</p> <p>Oracle CM SDK 通常ノードの現行の Java コマンドには、次の引数が含まれています。</p> <pre>-XX:+OverrideDefaultLibthread</pre> <p>この引数は、Solaris 2.8 で実行している場合にのみ有効です。Solaris 2.9 で実行している場合は、この引数を削除してください。Solaris 2.9 でこの引数をそのままにしておくと、問題が発生する可能性があります。</p> | <p>Solaris 2.9 で実行している場合は、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 任意の中間層マシンで Application Server Control にログインし、「ノード構成」ページに移動します。 2. 通常ノードの構成ごとに、「Java コマンド」プロパティから <code>-XX:+OverrideDefaultLibthread</code> を削除し、「OK」をクリックします。 3. 各通常ノードを再起動します。 <p>ノード構成の変更と通常ノードの再起動の詳細は、『Oracle Content Management SDK 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>注意：新しく作成するノード構成にこの引数を指定しないように注意してください。</p> |

表 1-2 管理上の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|---|
| 1718014 | <p>SQL 予約語と同じ名前の拡張属性を追加できない。</p> <p>属性に UNIQUE や SELECT などの Oracle 予約語と同じ名前を付けることはできません。</p> | <p>属性には予約語以外の名前を付けてください。予約語の一覧は、『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。</p> |
| 1683035 | <p>Property Inspector: Solaris では、マウスを使用してスプリッタを操作した場合、サイズを変更できない。</p> <p>Solaris では、「カテゴリ」や「リレーションシップ」などのプルダウン・スプリッタをマウスを使用して操作した場合、Property Inspector によるサイズ変更は正常に機能しません。その結果、ユーザーが手動でスプリッタをクリックしてプルダウンしないかぎり、カテゴリやリレーションシップは表示できません。</p> | <p>「プロパティ」、「カテゴリ」、「リレーションシップ」のいずれかのタブに移動する前に、「プロパティ」タブをマウスで 2 度クリックしておくと、すべてのスプリッタのサイズが正常に変更されます。この操作の実行は 1 回のみにする必要があります。</p> |
| 3181920 | <p>Oracle Internet Directory グループ名の変更が Oracle CM SDK と同期しない。</p> <p>グループ名が Oracle Internet Directory の内部で変更された場合、その変更内容は Oracle CM SDK には反映されません。これは、Oracle Internet Directory の制限事項です。</p> | <p>このリリースでは、<code>ldapmodify</code> を使用して Oracle Internet Directory グループの名前 (<code>cn/dn/rdn</code>) を変更しないでください。</p> |
| 2216321 | <p>OID User Migration ツールを使用している場合、削除済のユーザーを再作成しようとすると失敗する。</p> <p>OID User Migration ツールによってユーザーを <code>IfsCredentialManager</code> から <code>OidCredentialManager</code> へ移行する場合、移行されたユーザーの識別名およびパスワードは <code>IfsCredentialManager</code> から削除されません。移行後、移行済のユーザーを削除し、その後で <code>IfsCredentialManager</code> を使用して同じ識別名の新しいユーザーを作成しようとすると、次の例外が発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IFS-10154: ユーザー（ユーザー名）を作成できません。 ■ IFS-10172: 識別名が一意ではありません。 | <p>以前に削除したユーザーの <code>IfsCredentialManager</code> エントリを明示的に削除します。明示的に削除するには、<code>oracle.ifs.server.S_LibrarySession</code> の <code>DYNCredentialManagerDeleteUse()</code> メソッドを呼び出します。</p> |

表 1-2 管理上の不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------------------|---|--|
| 3164833 | Oracle CM SDK Manager 内の BFILE パスのヒントの文には誤植がある。 「拡張」→「システム」→「LOB 記憶域」ページの BFILE ベース・パスの下のヒントには、誤植があります。 | 正しい文は次のとおりです。 「UNIX では「/」で始まり、Windows ではドライブ文字で始まる絶対パス、または「/」で始まるデータベースの Oracle ホームからの相対パスを指定できます。」 |
| 2988355 | 既存の Oracle CM SDK ユーザーが、Oracle CM SDK 向けの Oracle Internet Directory リリース 1 または 2 に対して認証されない。 これらのリリースの Oracle Internet Directory に対して Oracle CM SDK を構成した後で作成された新規ユーザーは認証されますが、Oracle Internet Directory インスタンスの既存のユーザーは認証されません。 | ユーザーを認証するには、その前にユーザーのパスワード検証機能を再生成する必要があります。既存のユーザーは、oiddas を使用してパスワードをリセットする必要があります。 |
| 3258285 | 日本語環境の Oracle CM SDK Object Inspector でオブジェクトを日付で検索できません。 | 日付による検索は英語環境でのみ有効です。 |
| 3161119、 3161128 | ifsshell ユーティリティで次の機能は利用できません。 ■ mkdir コマンドの -p オプション ■ shell コマンド | 本リリースではサポートされておりません。 |

表 1-3 Oracle CM SDK の一般的な不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------------------|--|--|
| 2460867、 1924737 | アドバンスド・キュー（AQ）を削除する前にスキーマを削除すると、失敗する場合がある。 AQ を削除する前にスキーマを削除すると、次のエラーが発生する場合があります。 1 行でエラーが発生しました。: ORA-00604: 再帰 SQL レベル 1 でエラーが発生しました。 ORA-24005: キュー表を削除するには、DBMS_AQADM.DROP_QUEUE_TABLE を使用しなければなりません。 スキーマを削除する場合は、必ずその前に DropQueues.sql を使用して AQ を削除してください。 | 一度このエラーが発生すると、スキーマは削除できなくなります。新しいスキーマを作成する必要があります。 |
| 1724775 | 索引付けされていないファイルも返すという条件付きの OR 演算によるコンテンツ・ベース検索で、索引付けファイルのみ返される。 "all files containing 'Bob'" など、索引付けされていないファイルを返すという属性検索付きの OR 演算によるコンテンツ・ベース検索を実行すると、検索結果に索引付けされていないファイルは返されません。 | 検索をコンテンツ検索と属性検索の 2 つに分割します。 |

表 1-3 Oracle CM SDK の一般的な不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------------------|--|--------------------|
| 1369729、 1389141 | <p>ユーザーに付与されているアクセス権限の対象オブジェクトを表示できない。（ユーザーのアクセス権限が取り消されたオブジェクトの属性にユーザーがアクセスしようとする、<code>IfsException</code> が発生する。）</p> <p>あるユーザーがオブジェクトの ACL を変更して別のユーザーがそのオブジェクトを検出できるようにしても、後者のユーザーが Oracle CM SDK を切断して再接続するまでは、オブジェクトを検出できない場合があります。たとえば、ユーザー A がフォルダ内のオブジェクトの ACL を Private から Public に変更しても、ユーザー B は Oracle CM SDK を切断して再接続するまで、このオブジェクトを参照できません。</p> <p>逆に、ユーザー B がオブジェクトを検出した後で、ユーザー A がそのオブジェクトの ACL を変更してユーザー B が参照できないようにしても、ユーザー B は Oracle CM SDK を切断して再接続するまで、引き続きそのオブジェクトを参照できます。ただし、ユーザー B がそのオブジェクトに対して操作（名前の取得など）を実行すると、この操作は失敗し、<code>IfsException</code> が発生して、ユーザー B にはその操作を実行する権限がないことが表示されます。</p> | セッションを切断して、再接続します。 |

表 1-4 AFP の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|---|
| 2380571 | <p>Mac ファイルのサイズにリソースの分岐サイズが考慮されない。</p> <p>リソースの分岐はサイズ計算の対象外です。したがって、ドキュメントのサイズは正確でない場合があります。</p> | ありません。 |
| 1990453 | <p>Mac OS Finder を使用して Oracle CM SDK 上に（AFP ボリュームとしてマウントされた）ファイルを暗号化すると、「File」→「Encrypt」コマンドが失敗する。</p> <p>Mac OS の「File」→「Encrypt」ユーティリティは、名前にアスタリスク（*）を含む一時ファイルを作成します。Oracle CM SDK ではファイル名にアスタリスクを使用できないため、このコマンドは、マウントされた AFP ボリュームを介してアクセスされる Oracle CM SDK ファイルでは失敗します。</p> | Oracle CM SDK のファイルは、Mac からは暗号化しないでください。かわりに、ファイルを Mac 上でローカルに暗号化し、その暗号化されたファイルを AFP を介して Oracle CM SDK にコピーします。 |
| 2719007 | <p>デフォルトのプロトコル・キャラクタ・セットが全体的に適用される。</p> <p>AFP サーバー・プロトコル（または、コマンド）エンコードはサーバー全体に適用される定数です。AFP サーバーに接続するすべてのユーザー・セッションは、同じエンコードを使用します。ユーザー単位またはセッション単位でこのエンコードをオーバーライドする方法はありません。異なるエンコードを適用して AFP サーバーに接続する必要がある AFP クライアント（Macintosh クライアント）がある場合、このクライアントは AFP サーバーのエンコードを適宜変更しないかぎり接続できません。</p> | 異なるエンコードを使用する複数のクライアントが AFP サーバーを共同で使用するには、複数の AFP サーバーを起動する必要があります。そのためには、複数の中間層マシンを使用し、目的のエンコードが適用された AFP サーバーを各マシンで実行します。AFP サーバーのエンコードはプロパティ <code>IFS.SERVER.PROTOCOL.AFP.Encoding</code> に指定されています。 |

表 1-4 AFP の不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|--|
| 2847678 | AFP ではリンクがサポートされていない。 AFP では新しい Oracle CM SDK リンク機能は使用できません。 | ファイルのコピーを作成する必要があります。 |
| 2995643 | 長い名前の付いた Microsoft PowerPoint ファイルを直接保存できない。 31 文字を超えるファイル名の PowerPoint ファイルを AFP を使用して保存すると、このファイル名は切り捨てられて表示されます。例を次に示します。 long_long_long_long_lo?5A0B.ppt ユーザーは、他のファイルと同様に、この PowerPoint ファイルを開いてローカルのハード・ディスクにコピーできます。ただし、PowerPoint で開いた後に、ファイルの内容を変更して「上書き保存」コマンドを実行すると、「ファイル<ファイル名>にアクセス中にエラーが発生しました」というエラー・メッセージが表示されます。変更内容は保存されず、開いていた元のファイルは削除されます（「ごみ箱」に移動され、PowerPoint Temp 0 などの名前に変更されます）。 | 変更内容を保存してファイルを維持するには、「名前を付けて保存」コマンドを実行します。実行方法は、メニューまたはツールバーからコマンドを選択するか、ファイルを閉じるときに表示されるダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。別の名前を付けてファイルを保存します。こうすると、新しいファイルは正しく保存されます。 |

表 1-5 NFS の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|--|
| 1749601 | Oracle CM SDK NFS で chgrp コマンドを実行できない。 chgrp コマンドでは、ファイルのモードを変更できません。 | ありません。セキュリティ・モデルが異なるため、このコマンドには効力がありません。 |
| 1749621 | Oracle CM SDK NFS で chmod コマンドを実行できない。 chmod コマンドでは、ファイルのモードを変更できません。 | ありません。セキュリティ・モデルが異なるため、このコマンドには効力がありません。 |
| 1750049 | モード属性を設定できない。 Oracle CM SDK NFS では、アクセス権モードのビットを変更できません。 | ありません。セキュリティ・モデルが異なるため、このコマンドには効力がありません。 |
| 2730990 | 削除済ファイルへのリンクを編集できない。 削除済のドキュメントへのリンクを編集すると、エラーが発生します。 | 削除済ファイルへのリンクは削除します。 |

表 1-6 HTTP / WebDAV の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|---|-------------------------|
| 2386806 | '%' を含む URL が機能しない。 URL の中に '%' を使用すると、問題が発生します。 | URL には '%' を使用しないでください。 |
| 2393968 | '#' を含む URL が機能しない。 URL の中に '#' を使用すると、問題が発生します。 | URL には '#' を使用しないでください。 |

表 1-6 HTTP / WebDAV の不具合 (続き)

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|---|--|
| 2337719 | ';'を含む URL が機能しない。 URL の中に ';' を使用すると、問題が発生します。 | URL には ';' を使用しないでください。 |
| 3006494 | 同じクライアント・コンピュータ上で、異なるユーザー資格証明を使用する複数の Web フォルダ・マッピングを作成できない。 Web フォルダの制限により、Oracle CM SDK では、同一の Windows クライアントから異なるユーザーとして Web フォルダにログインすることはサポートされていません。Web フォルダではユーザー資格証明をキャッシュに格納します。そのため、最初に user1 として Web フォルダ・マッピングを作成し、その後、user2 として 2 つ目のマッピングを作成した場合、user2 は、user1 が接続を切断した後に user1 のコンテンツにアクセスできます。 | 異なるユーザー・アカウントを使用する複数の Web フォルダ・マッピングは、同一のクライアント・コンピュータからは作成しないでください。 あるいは、Windows クライアント・マシンを再起動する方法もあります。 |
| 2955251 | Cookie のない WebDAV クライアントでは Oracle CM SDK に接続できない。 複数の Oracle CM SDK 中間層が、ロード・バランス要求の Cookie に依存するロード・バランサを介して動作している場合、Cookie を保存しない WebDAV クライアントでは、ロード・バランサを介して Oracle CM SDK インスタンスにアクセスできません。この問題は、特に Macintosh クライアント・マシンで顕著です。 | Cookie ではなく IP アドレスを使用してロード・バランシングを実行するように、ロード・バランサを構成します。 |
| 2697262 | WebDAV のドラッグ・アンド・ドロップ・ダウンロードを実行すると、ファイル・サイズが 0 バイトになる場合がある。 ファイルが Oracle CM SDK 上の別のユーザーによってロックされている場合、Oracle CM SDK 上の Web フォルダからローカル PC のファイル・システムへファイルをドラッグすると、ファイル・サイズが 0 バイトになる場合があります。この問題の原因は、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.2402 と考えられます。 | Internet Explorer を最新の Service Pack にアップグレードします。 クライアントの環境が、「 クライアントの動作保証 」の「 WebDAV: Web フォルダ 」に記載されているサポート対象の構成に適合していることを確認します。 |
| 3225450 | https を使用して実行するように Oracle CM SDK を構成した場合、WebDAV を介して認証を実行できない。 Oracle CM SDK を、https を使用して実行するように設定した場合は、認証に問題があるため、Web フォルダは使用できません。これは、デフォルトのセキュリティ・チェックにより、Basic 認証による認証ができなくなることが原因です。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. Application Server Control にログインし、「サーバー構成」ページに移動します。 2. 次の DavServerConfiguration プロパティを TRUE に設定します。 IFS.SERVER.PROTOCOL. DAV.IfsServer.Auth. ClearText.Accept 3. OC4J_ifs_cmsdk を再起動して、各中間層ホストに DAV サーバーをリロードします。 <p>サーバー構成パラメータの設定、サーバーのリロードおよび OC4J インスタンスの再起動の詳細は、『Oracle Content Management SDK 管理者ガイド』を参照してください。</p> |

表 1-7 Windows / SMB / 印刷サービスの不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|-----------------|---|---|
| 1113581 | <p>SMB でバージョンングされたファイルの削除または名前変更を実行できない。</p> <p>SMB でバージョンングされたファイルの削除または名前変更を実行しようとする、そのファイルの全体または一部がロックされている可能性があることを示すエラー・メッセージが表示されます。Microsoft Word や Microsoft Excel のような特定のアプリケーションでは、そのドキュメントの古いバージョンを削除することにより、作業内容を保存します。この動作は、データ属性の消失を招き、Oracle CM SDK のバージョンング機能に影響を及ぼすため、Oracle CM SDK の SMB サーバーでは、バージョンングされたファイルの削除や名前変更を許可していません。</p> | SMB を使用して削除する場合は、ドキュメントがバージョンングされていないことをあらかじめ確認しておきます。 |
| 2472522、2995548 | <p>Windows が複数の印刷ジョブを生成する。</p> <p>Windows のバージョンによっては、ユーザーが 1 つのドキュメントの印刷を要求したときに、Oracle CM SDK に複数の印刷ジョブが作成されます。この余分な印刷ジョブの中身は空で、紙には出力されません。ただし、このジョブはしばらくの間印刷キューに表示されます。ドキュメントは正しく印刷されます。</p> | プリンタ・キューを表示するダイアログ・ボックスにアクセスし、空のジョブを手動で取り消します。 |
| 3020371 | <p>Hummingbird NFS クライアントでは SMB マウントポイントを表示できない。</p> <p>マシンに Hummingbird NFS クライアントがインストールされている場合は、NFS と SMB の両方をサポートするサーバーに接続するよう指示すると、マシンは NFS を使用しようとし、「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックし、「¥¥servername」と入力すると、Hummingbird NFS クライアントによって新しいウィンドウに NFS マウントポイントが表示されます。SMB マウントポイントとプリンタは表示されません。</p> | <p>この問題には、次に示すような多数の対処方法があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスまたは「プリンタの追加ウィザード」を使用して、SMB マウントポイントおよびプリンタを直接マウントします。 2. SMB サーバーを実行しているマシン上の NFS サーバーを無効にします。 3. サーバー上の SMB マウントポイントを表示する必要があるマシンから Hummingbird NFS クライアントをアンインストールします。 |
| 2344972 | <p>ユーザー名およびパスワードで制限されているプリンタで印刷できない。</p> <p>Windows NT/2000 からプリンタに接続すると、ユーザーはユーザー名およびパスワードの入力を要求されません。プリンタの共有がユーザー名およびパスワードで制限されている場合、ユーザーはそのプリンタでは印刷できません。</p> | <p>この問題には次の 2 つの対処方法があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プリンタをマウントする前に、ネットワーク・ドライブを同じサーバー上にあるファイルの共有に割り当てます。ユーザー名とパスワードを確認する画面が表示されたら、後でこのプリンタにアクセスするときに使用するユーザー名およびパスワードを入力します。 2. プリンタをマウントする前に、DOS プロンプトを開き、次のように入力します。 <pre>> net use ¥¥<server-name>¥<printer-name> <password> /USER:<username></pre> <p>その後で、プリンタの共有と同じ名前を使用してプリンタをマウントします。</p> |

表 1-7 Windows / SMB / 印刷サービスの不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|---|
| 2699323 | <p>20 文字を超えるユーザー名のユーザーが、Windows クライアントから SMB を介して接続できない。</p> <p>このエラーは、ユーザー名が無効であることを示しています。</p> | Windows オペレーティング・システムでは、20 文字を超えるユーザー名を使用できません。Windows クライアントから SMB へ接続するには、別のユーザー名を使用してください。 |
| 3027080 | <p>DOS 8.3 形式のファイル名を使用するプログラムが、長いファイル名では動作しない。</p> <p>SMB サーバーは長いファイル名を DOS 8.3 形式の短いファイル名に変換する機能をサポートしていないため、DOS 8.3 形式のファイル名を使用するプログラムは SMB サーバーでは動作しません。そのようなプログラムの例として、「DOS EDIT」、「イメージング」および「ペイント」などがあります。これらのプログラムには、DOS 8.3 形式のファイル名が必要です。また、これらのプログラムでは、パス内の各ディレクトリを 8.3 形式のディレクトリ名にすることも必要です。</p> | ファイルの名前を DOS 8.3 形式のファイル名に変更します。必要に応じて、長いファイル名のディレクトリがパス内に入らないように、ファイルを別のディレクトリに移動します。 |
| 2890902 | <p>SMB を使用してフォルダ間でファイルをコピーすると、ファイルのメタデータが失われる。</p> <p>あるフォルダから別のフォルダへ Oracle CM SDK SMB サーバーを使用してファイルをコピーすると、ファイルの内容のみがコピーされます。カテゴリなどの Oracle CM SDK メタデータはコピーされません。これは、Windows オペレーティング・システムの制限によるものです。Windows オペレーティング・システムは Oracle CM SDK メタデータを処理できないため、ファイルのコピー時にメタデータはコピーされません。</p> <p>場合によっては、ファイルのコピー操作ではなく、Windows のエクスプローラでのファイルの切り取りおよび貼付け操作によってファイルを移動します。ファイルの移動を実行した場合、Oracle CM SDK メタデータは維持されます。</p> | メタデータを持つファイルをコピーする場合は、Web Starter Application または開発者独自のカスタム・アプリケーションを使用します。 |
| 3008391 | <p>プリンタの追加ウィザードではプリンタを追加できないことがある。</p> <p>Windows クライアントから「プリンタの追加ウィザード」を介してプリンタを追加すると、プリンタが見つからないというエラー・メッセージが表示されることがあります。</p> | <p>「プリンタの追加ウィザード」を使用してプリンタを追加しないでください。かわりに、「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックし、「¥¥<servername>」と入力して、[Enter] を押します。</p> <p>表示されたウィンドウで、追加するプリンタをダブルクリックします。</p> |
| 3027564 | <p>PowerPoint ファイルを編集する場合、Windows NT では更新日が更新されない。</p> <p>Windows NT 上で Microsoft PowerPoint ファイルを編集している場合、ファイルを保存してもファイルの更新日が更新されないことがあります。</p> | Windows NT の最新のサービス・パックがインストールされていることを確認してください。問題が解消されない場合は、ファイルをローカル・ドライブに保存して、SMB が割り当てられているドライブにファイルをコピーします。 |

表 1-7 Windows / SMB / 印刷サービスの不具合（続き）

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|---|
| 3108043 | <p>SMB ログの詳細を参照するために、LogAllCommands サーバー構成パラメータを手動で追加し、これを TRUE に設定する必要があります。</p> <p>SMB サーバーには、ログ・ファイルに追加情報を記録するための構成パラメータがあります。この情報は、実行の対象となる SMB サーバー・コマンドで構成されており、SMB サーバー内の問題をデバッグするときに使用できます。</p> | <p>Application Server Control を使用して、IFS.SERVER.PROTOCOL.SMB.LogAllCommands パラメータを SmbServerConfiguration に追加します。ログ・ファイル内の SMB コマンドを参照するために、値を TRUE に設定します。</p> <p>サーバー構成パラメータの追加の詳細は、『Oracle Content Management SDK 管理者ガイド』を参照してください。</p> |

表 1-8 電子メールの不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|-------------------------------|
| 1859056 | <p>バイナリ・ドキュメントを索引付けできない。</p> <p>バイナリ・ドキュメントにはコンテンツ索引が付けられないため、検索できません。</p> | ありません。この機能は今後のリリースで提供される予定です。 |

表 1-9 XML の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|---|---|
| 1600470 | <p>電子メール・アドレスにマルチバイト・キャラクタを使用できない。</p> <p>デフォルトでは、XML でユーザーを作成すると、<Username> と <EmailAddressSuffix> が連結した電子メール・アドレスが作成されます。このユーザー名にマルチバイト・キャラクタが使用されていると、電子メール・アドレスにはマルチバイト・キャラクタを使用できないため、ユーザーの作成は失敗します。</p> | <EmailAddress> タグを使用することにより、マルチバイト・キャラクタを使用しない電子メール・アドレスを明示的に設定します。 |

表 1-10 Oracle FileSync の不具合

| 不具合番号 | 説明 | 対処方法 |
|---------|--|--|
| 3037418 | <p>Oracle FileSync のインストール言語のリストにアラビア語がない。</p> <p>Oracle FileSync はアラビア語環境のマシンにインストールでき、その場合はアラビア語で動作します。ただし、インストール・プロセスではアラビア語が表示されません。</p> | 別の言語で Oracle FileSync をインストールしてから、ロケールを「アラビア語」に切り替えます。 |
| 2853182 | <p>Oracle FileSync の「除外」タブで、「タイプ」列を切り替えると設定が保存されない。</p> <p>マッピングでは、拡張子別に除外してから同期を実行します。「ログ・ファイル」画面から組み込んだ項目を「除外」タブから除外しても、変更内容は保存されません。</p> | ファイルの組み込みおよび除外を実行するには、「ログ・ファイル」画面を使用します。 |